

『赤光』についての疑問

国崎 望久 太郎

1

茂吉の『赤光』は大正二年十月十五日、東雲堂書店から刊行されたが第五版のち茂吉は改選『赤光』を発行した。大正十年十一月一日、春陽堂刊である。そして茂吉は『赤光』の歌は既にいろいろの書物に引用されたけれども、今後『赤光』の歌を論ぜられる場合には、改選『赤光』の方に拠つてもらひたいと思ふ。」（「改撰『赤光』跋」といつている。初版と改撰本との相違は、かなりあるが、初版本から七十五首を削除し、「塩原行」中に一首を加え、歌数が七百六十首になつたことと、歌の排列を年代順に改めたことの二つがその大きな点である。この外、改作などの細部にわたる点は既にいろいろ考察されているし、岩波文庫本『赤光』や全集などによつても、比較的容易に知ることができるようになつている。われわれは著者が欲したよう

に、改撰『赤光』を定本にすることが、あるいは正しいかも知れないが、特に多少とも厳密な追求をこころみる際には、著者の意向にそむくことも許されねばなるまい。いづれに依つて論ずるにしても、兩本を比較することは必須の手続きであるし、それが可能になつたことは、ありがたいことである。茂吉は歌人を論ずる場合に、しばしばその「発育史」を問題にした。われわれが茂吉の「発育史」を考へる場合に、初版本が一層適切な材料であることはいうまでもない。改撰本には、後からの作者の意志がより多く介入しているからである。それでわれわれは初版本によつて作品もしるすことにしたい。それはいうまでもなく改撰本の価値を否定することではなく、「発育史」の観点にたつ限り必要な前提であるからである。

いまここで問題にしようとする一連は、明治三十八年作「折り触れ」の一七首であるが、年代順に編成がえした改

撰本では「赤光」巻頭に掲載されている。初版本では巻末に近いところに配置された一連である。一連といつても所謂連作ではなく、その時々々の作品を一纏めにしたものである。いま行論の都合上、次に一連全部を記しておく。番号は初版本によつて、巻頭から順次つけられたものである。

- 五六七 黒き実の円らつぶらとひかる実の柿は一本たちにけるかも
五六八 浅草の仏つくりの前来れば少女まぼほしく落日を見るも
五六九 本よみて賢くなれと戦場のわが兄は銭を呉れたまひたり
五七〇 戦場のわが兄より来し銭もちて泣きあたりけり涙が落ち
て
五七一 桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひてちぎりに居ればにほひするかも
五七二 はるばると母は戦を思ひたまふ桑の木の実は熟みあたりけり
五七三 けふの日は母の辺にゐてくろぐろと熟める桑の実食みにけるかも
五七四 かがやける真夏日のもとたらちねは戦を思ふ桑の実くろし
五七五 馬屋のべにをだまきの花乏しらにをりをり馬が尾を振り
にけり
五七六 数学のつもりになりて考へしに五目並べに勝ちにけるかも

2

茂吉が作歌に志したのは明治三十八年一月「神田の貸本屋から正岡子規遺稿第一篇『竹の里』歌を借りて読」んでからであることは、全集の「斎藤茂吉年譜」、その外に示すところでも何等疑いはない。子規の作品にふれ、それによつて茂吉は「作歌に志した。」この「作歌に志した」ことの具体的な意味は、おそらく自己の抒情的衝動に表現を与える可能性を発見し、その方法と秩序とを子規の作品の中に予見したことであつたらう。子規の作品を「模倣」したことは茂吉自らいうところではあるが、この「模倣」の意味も同様である。外形的な字句の模倣や素材の模倣ももちろんふくまれるわけであるが、その適例は「地獄極楽図」にみられるが、彼のいう模倣は、むしろ本質的な抒情詩的原型の子規における発見とその追求であつた。子規との遭逢は、茂吉にとつては、自己の抒情詩人としての意義を確認せしめたのみでなく、探求すべき原型を発見し、それへの不断の「模倣」こそ詩人の成長を約束するものであることを信ぜしめた。それが最後にいたるまで茂吉が「子規宗」であつた所以である。この点にあふれることは、今の問題からされるので、他日にゆづらねばならないが、明治三十八年のはじめに子規に出会つたことの文学的意味は、大体

- 五七七 熱いでて一夜寝しかばこの朝け梅のつぼみをつばらかに見つ
五七八 春かぜの吹くことはげし朝ぼらけ梅のつぼみは大きかりけり
五七九 入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて来にけり
五八〇 寝て思へは夢の如かり山焼けて南の空はほの赤かりし
五八一 さ庭べの八重山吹の一枝ちりしばらく見ねばみな散りにけり
五八二 日輪がすでに真赤になりたれば物干にいでて欠伸せりけり
五八三 ゆふさりてランブともせばひと時は心静まりて何もせず居り
さて以上の十七首はあきらかに「明治三十八年作」とされ、一纏めになつているものである。しかしはたして明治三十八年作となしうるのであるうか、どうか。もちろん茂吉みずから三十八年作としている以上、疑問の餘地はないようであるが、その「発育史」に留意した場合、必ずしも作者の主張に同じ難い疑問のいくつかが残つてくる。いまその二三の疑問点をあげて考えてみたいと思うのがこの小文の主旨である。

以上のように理解すべきものと思われる。

だから子規の「竹の里歌」に接する以前にいくつか作つた茂吉の短歌の中に、子規的なものに触発される因子を内含していたことは当然である。だから茂吉の「赤光」以前の歌を抄出して、万葉系統の作歌をしたらうと想像するのも、決して妄でないような気がするといひ、「そういふ事を思はせる傾向が、この極めて初期の作歌に見えて居るのである。」と指摘したのは佐藤佐太郎氏であつた。そしてこの指摘は正しいと思う。万葉系統の作歌とは、いうまでもなく子規系統の作歌ということである。すくなくとも茂吉の場合においては、万葉と子規との系例は、本質的に區別されていないことは附言するまでもないことである。彼が「竹の里歌」を手にする以前の作品は手紙その他に記るされたものが相当の数にのぼつており、全集第五十六巻に、「短歌補遺」として纏められている。その最初は明治三十年十月卅日、守谷富太郎宛の中の二首で、この時、茂吉は十七才、東京にいて独乙協会学校別科に通学していた。三十二年に九首、三十三年九首、三十四年十二首、とんで三十八年には秋旻選の読売新聞募集和歌の入選作が、二月五日以降十七首あり、書翰中の作も六十首を数えることができる。この年の作歌熱が非常に昂揚していた模様などは、この歌数のみでなく渡辺幸造宛の手紙によつて具体的に

に知ることができる。子規の「地獄極楽図」の模倣と自ら称して、「赤光」に「明治三十九年作」と明記されている作品の原型も、この三十八年の渡辺幸造宛の書翰中にみられる。すなわち「地獄極楽の掛図を昔見たりしを想ひいでて作れる歌」と題するもので、彼の苦心の察せられるものであつた。この作品にも言及したいが今はやめておく。これらの作品は補遺として収録されているもので、もちろん、このほかに消滅した作品の数も相当多いことは、当然予期されることであるが、茂吉短歌の発育史という見地からすれば、三十八年の大体の傾向は、此を察知するにたるものが幸に残つていとみなしてよいと思う。しかも、この年の作品が、はじめにあげた『赤光』の中の作品とかなりあつているわけである。

3

だから次に「補遺」中にあるこの年の作風に一瞥を投じてみよう。

三十八年度には年譜に自記したごとく、子規の歌に触れているが、読売新聞に応募した作品は次のようなものである。これは選者秋夏によつて掲載されたものであるから、おのずからの結果ともいえようが、こういう傾向の作歌を試みつつあつた事実はもちろん否定できぬ。

そのもつとも典型的な事例は「地獄極楽図」（明治三十九年作）として、『赤光』に収録されたものであるが、三十八年五月十四日、渡辺幸造宛の書翰中に既に「原作」が発見される。「くれなゐの炎燃えたつ火車に亡者を載せて白き鬼引く」「あはれなる亡者対へば浄玻璃の鏡に過去はあらはれにけり」以下四首の作品は、三十九年作の「原作」には違いないが、殆んど原形をとどめぬまでに改作されている。詩的モチーフという点からいへば、あきらかに三十八年のものであつた。けれども制作年代としては『赤光』どおり三十九年作と見做すべきであろうか。実はここにも疑点がある。茂吉は『赤光』を編集する時、その制作年時を、その作品のモチーフを抱いた時よりも、表現の完了した時をもつてあてたのであろうか。「地獄極楽図」をみれば、そう考えることが正しいと思はれる。ようであるそれ以外に考える餘地はないと思はれる。

けれども、ひるがえつて「三十八年作」にこの編集意識を適用してみるとかなり大きな疑問が生じてくる。茂吉が『赤光』で「三十八年作」とした「折に触れ」とした一連は、果して三十八年作であるか。三十八年に作品として、その表現を完了したものであるか。どうか。こういう疑念は次の諸点からも生じてくる問題である。

既にあげた三十八年度中の作品ABC……等をみれば明

四

- A その昔しまだ乙女子の姉君と若菜つみけんかつしかの里 (二月五日)
- B わが妻よいましも吾も若やぎて桜花みんいざ若菜くへ (〃)
- C 静かなる春の夕暮舟下る天草灘に日のあかきかも (三月九日)
- D 夕ぐれの一里半みちくたびれて見返る桃のくれなる遙か (三月十八日)
- E 猿引を旅の道づれ陸奥の雲雀なく野に飯くひにけり (四月二十九日)
- F 雲雀なくつばな童の野のひがし豆入寸馬畑に仕事す (〃)
- G 楽みは事なし果てて団扇持ちあふ向に寝て星を見る時 (六月十日)
- H 氷屋の旗に風ふきビイドロのガラス暖簾に灯きらめく (六月十日)
- I 水打てば芭蕉玉まき玉落ちて灯火ゆらぎ風鈴の鳴る (六月二十日)

大体以上のような作品で、全体的に見れば当時行われていた「叙景詩」運動や佐々木信綱に代表されるような一種感傷的な叙情的な作風であり、F・G・H・Iなどの子規的作風も明かに一つの方向として出てきている。

Gの「楽しみは」などは、直接曙覧からではなく、あきらかに子規の曙覧論に触発されたもので、こうした試作過程をもふくめて子規の影響が、茂吉の上に直接的且つ支配的に浸透して行く。それが三十八年度である。

らかなように、それらは、『赤光』の「折に触れ」(三十八年作)には比較すべくないほど習作期のたどたどしさを露骨にみせている。用語の上においても技巧の点においても、もちろん観照の深度においても、とうてい「折に触れ」の作品中に組み入れることはできないものである。

それだけではない。『赤光』以外に拾うことのできる三十九年度の作品と比較すれば、「折に触れ」(三十八年作)が、飛躍的に完成された独自の発想と技巧をもつことが指摘される。そして全集第五十六巻に収録された作品——前掲以外に三十一首ほどの作品があるが、これらと三十九年度との間には、大体において連続した作歌傾向が観取される。つまり、「折に触れ」を除外して考えれば、茂吉の短歌の「発育史」は、比較的順当な展開として把握することができる。そして「折に触れ」をそのままその間におくことは茂吉短歌の順当な展開からいつてやや異常な感じを与えるものである。それか私が疑問を抱いた直接的な理由であった。明治三十九年度における茂吉の作品の「発育」は、次にあげる「馬酔木」掲載の作品によつて具体的に知ることができるが、それはかなり幼稚な技巧の作品である。

4

「馬酔木」第三巻二号(明治三十九年二月)にのつた次の

五首は、茂吉が、伊藤左千夫を一月に初めて訪問したのに提出したもので「馬酔木」には初出の歌である。

紫のほへる菑かくはしみながめて居るかも花あやめ草

(少女年十二)

我が見ても美しくしぎぬに喜びて羽子つく見れば命ほりすも

(同)

○来て見れば雪げの川べ白がねの柳ふみり露のとも咲けり

(早春二首)

空蟬に春来にければ背戸の田に虫うごめけり畔つくしもしもえ

(同)

ひきつづいて三巻三号には次の四首

桜花匂ふやまとのかくはしの若きもののふみ酒奉る

○生きて来し丈夫かおも赤くなりおどるを見ればうれしくて泣か

ゆ(凱旋二首)

生きて来し友が手づからの酒づきにうれし極まりて酔ひにける

かも

○凱旋り来て今日のうたげに酒をのむ海のますらをに髻あらずけ

り

三巻四号には次の十首

祖母と孫

ありがたの仏も知らにば君とあかき灯ともし吾も念仏すも

如来の黄金かよふおんに有難とのらす吾もありがた

いろとあれば我は兄かも祖母ぎみとさぬれどさ夜は乳の恋しも

梅

世くだちて聖し出ねば谷つべに乏しくさける梅の花ぞも

仏生会

○み仏のあれましの日と玉蓮幼なあけの葉池に浮くらし

(仏生会二首)

○み仏のみ堂に垂る、藤浪の花の紫いまだともしも

もろ／＼はよろこびとよみ花降らひ大悲み仏あれましにけり

落葉松

○青玉のふじ松が芽は久方のあめに向ひて並びてをもゆ(君聖二首)

並みもゆるふじ松が芽は空蟬の童子なしてむつまじく見ゆ

○春雨は天の乳かもふじ松の玉芽あまねくふくらみにけり

第三巻(五号七月二十五日号)には「雑の歌」として九

首(うち三首「赤先」、六号には十二首(うち五首「赤

光」七号には二十四首(うち六首「赤光」というように

茂吉の作歌数は、三十九年度に急速に増加し、制作熱も著

しく高まつている。右の引用のうち○印を付したものが、

『赤光』を編集する際に茂吉によつて撰ばれたものであつ

た。通算すると「馬酔木」掲載歌六十九首中に、(このう

ちには撰歌欄以外の課題歌、消息歌もふくむ)僅か二十三

首が『赤光』に収録されている。収録された比率もさるこ

とながら、こうした厳選をせざるをえなかつた作品の質が

問題である。すくなくとも三十九年度の茂吉の作品の実質、

特に表現技巧の幼稚と未熟とは一々ここに指摘するまでも

あるまい。第一首の四句「ながめて居るかも」、第二首の

むしろ茂吉の個性的な感覚と技巧との力強い統一がある。

それだけでなく、この一連は『赤光』において突然あらわれて来た作品である。というのは三十八年度の手紙・日記・投稿歌等を調べてみても、この原型になる作品を検出することはほとんどできない。三十九年作の「地獄極楽図」の原型が、三十八年五月十四日、渡辺幸造宛の手紙中に発見されるという具合には行かない。ただ

寝て思へば夢のやうなり山焼けて南の空はほの赤かりし(十五年前のことを思ひ出してヤツタツモリ)

という一首が、三十八年五月十四日渡辺幸造宛書翰中にあるだけである。これは『赤光中』

五八〇 寝て思へば夢の如かり山焼けて南の空はほの赤かりしの原型というよりほとんどそのままの作品である。この例によれば、全集にも収録されていない書翰・日記その他によつて、原作と考えられるものが、いくつか発見される可能性はもちろんあるわけである。それを否定することはできない。

けれども右のように三十八年作がふくまれていることによつて、「折に触れ」の全部が全部三十八年作とすることには疑問がある。むしろ三十八年作をふくみながらも全体の詩的印象は、もつとのちの情緒によつて統一されているとせねばなるまい。特に彼の「発育史」に留意した場合に、

て順調なものであつたことが観取されるだろう。

ところが『赤光』の中の「折に触れ」(明治三十八年作)はもつと完成した表現を獲得している。習作期のたどたどしさ、少くとも三十九年作にみたような幼稚な表現はない。

当然起る疑問は既に述べておいた通りである。私は「折に触れ」が、三十八年作でない主張する積極的な根拠をもつわけではない。一首だけであつても三十八年作のものをふくんでいる。しかし私は、その全体を三十八年作とすることは無理であると思う。強いて推定をすれば、茂吉が『赤光』を編纂する時、三十八年作の「原作」をノートに記録して、それを改作して三十八年作としたということである。これもありうべきことである。たとえば古泉千樞はその『川のほとり』巻頭の歌「山焼」（五首）を、明治三十七年作としている。『川のほとり』の中で「先生（左千夫）にはじめて歌をみて貰つた年から、先生にはじめてお逢ひした年（註四十年）までの四年間の作のうち三十五首を採つた。」とあるが、「馬酔木」所載の歌で原作の儘採つてあるのは、一首だけである。あとは原作がどれであるかわからないほど改作されている。むしろ新しく創作されたものとみるべきで、このことは小泉三博士も既に指摘していられる。同様の事情が茂吉の場合にあつても、いさう不思議ではない。ただ右の推定は、「原作」が何等かの形で既にあつたという前提に立脚していた。それが、今後出現する可能性も、もちろんあるわけであるが、もし観点をかえて、「地獄極楽図」のように、三十八年の原作を三十九年に改作して、その改作の日時を制作年代とするとい

う編纂意識にたてば、問題は別になつてくる。おそらくは三十八年作とすることはできないほど改作された形が「折に触れ」に相違ない。もつとも『赤光』の中で「地獄極楽図」を三十九年作としたことにも疑問があることは、さきに簡単に指摘しておいたが、「折に触れ」も改作時を制作年代とする立場にたてば三十八年作とすることはほとんどできないに相違ない。けれども茂吉の『赤光』を編纂するときの意識を、そのどちらかにきめてしまうことも問題であつて、彼は「作歌に志した」三十八年を重視し、その年の作品として「折に触れ」十七首を示めたのであろう。それは『赤光』全体の文学的効果からも配慮されたであらう。改選『赤光』の場合には、この作が巻頭におかれているが、いかにも全体との調和が保たれて、不自然でない印象を与える。初版においても、中にこの一連が、はさまれても何等な異質的な習作的な幼稚さは感ぜられない。そういう統一的文学的印象を与えるように配慮することは、歌集編纂の際の必然的な要請であるはずである。茂吉はそれに忠実であつたにすぎないともいえようか。

6

けれども、われわれの立場からすれば、この「折に触れ」（三十八年作）が、何時つくられたか、また改作され

たとすれば、何時改作されたかということが問題とならざるをえぬ。一首だけその原作とすべきものがあることは、前にもふれたが、今はそれを除去して残餘の作品については一般的に考えてみよう。個々別々には、あるいは原作とすべきものが発見される可能性もあるが、全体からいえば、やはり後期の新作（改作）とせねばならないという推定にたつわけである。その消極的な理由については既に述べてきた。

さて、五六九番「本よみて賢くなれと戦場のわが兄は錢を呉れたまひたり」以下、五七五番（あるいは五七四番）までの七首は日露戦争に關係している歌である。年譜明治三十七年の条「日露戦争第一年。予備役にある長兄広吉、次兄富太郎が共に応召出陣した。」とあるのによれば、兄は既に三十八年には戦場にあつた。作年中の兄が、長兄か次兄か不明であるが、戦場にあつて生死を賭して戦っている兄から遙々と送られてきた書籍代を手にして、若き茂吉（二十四才）が経験した深い感動は容易にこれを想像することができる。三十八年の年譜に「夏郷里に帰省した。」とあり、歌が熟める桑の実や紫蘇の匂いにふれているところをみると、これら一連の作歌の動因になつた感動が、三十八年夏のものであつたことは確かである。

けれども、その感動は其の時期には遂に表現される機会

をもたなかつた。彼の内的体験として深くたくわえられ、絶えず何等かの形で表現されることを求めながら、その機縁をもたなかつた。おそらく原型というべきものも作られなかつたであらう。断片的なものもないようである。越えて大正二年五月二十三日、茂吉三十二才の時に生母いくが没した。茂吉は十六日郷里に赴き、その看護につとめ、やがて命終に立ちあい、三十日に東京に帰つてゐる。この間の消息はいくつかの書翰によつても知ることができるが、何よりも「死にたまふ母」五十九首の大作によつて明かに示めされている。この傑作をささえている茂吉の悲痛な体験は、深く根源の生に根差している。その経験を契機に血族や郷里によする感動を新たに惹起したのではあるまいか。桑畑で涙をおとして戦場からの送金を手にした経験もこの時に想起され、表現への機縁を得たのではあるまいか。兄のことはないが、弟のことは

上の山の停車場に下り若くしていまは黙夫のおとうとを見たり
火を守りてさ夜ふけぬれば弟は現身のうたかなしく歌ふ

と歌つているし、

いのちある人あつまりて我が母のいのち死行くを見たり死ゆく

という歌の「いのちある人」の中には、戦場にいた兄もかならずまじつていたに相違ない。よしそうでなくとも「死

にたまふ母」に直面した茂吉が「はるばると母は戦を思ひたまふ」と歌つた三十八年の体験を想起したのは心理の必然であるまいか。三十八年の体験は、ここに美しい表現を獲得する契機をえたのではあるまいか。もちろんこういう推定は推定としてはかない価値しか主張できないわけである。けれども、

五七一 桑畑の畑のめぐりに紫蘇生ひてちぎりに居ればにほひす
るかも

五七五 馬屋のべにをだまきの花乏しらにをりをり馬が尾を振り
にけり

などを「死にたまふ母」の中の

死に近き母が目に寄りをだまきの花咲きたりといひにけるかな
ひとり来て蚕のへやに立ちたれば我が寂しさは極まりにけり
と比較すれば、その中の作品と考えてもよいほど類似している。素材の上からも技巧の点からも、また観想の色調からみても、大正二年作推定してよさそうである。すくなくとも明治三十八年作のままでありえないことは否定すべくもない。それでも三十八年作と強弁することは、茂吉短歌の「発育史」を観察せず、茂吉自身の編纂意識に素朴に信頼してしまつた結果である。

五七六

五六七 黒き実の円らつぶらとひかる実の柿は一本たちにけるか

を否定する消極的な一理由にはなると思う。

五七九 入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて来
にけり

の作も、大正二年作「きららぎ」の中の

狂院を早くまかりてひさびさに街をあゆめばひかり日に染む

平凡に涙をおとす耶蘇兵士あかきやけつを着つつ来にけり

きさらぎの天つひかりに飛行船ニコライ寺のうへを走れり

等の中に加えて、少しもおかしくない気分であり、観想である。

以上のように見てくれば、『赤光』の中の「折に触れ」（明治三十八年作）は、三十八年作ではありえないことが明らかに考えられるのではあるまいか。特に三十八年に原作又は原型をもつた「地獄極楽図」が、表現の完結をえた三十九年作とされているような見方からすれば（この点にも疑問はあるが）、「折に触れ」を「明治三十八年作」とすることは、ほとんど不可能である。疑問の餘地なく、否定してよいように思う。それでは何時制作されたか。私はその大部分は『赤光』編纂時の大正二年であろうと考えるが、これはもとより積極的な根拠があつての推定ではない。だからあくまで一の推定であつて、主張すべきことではないが、しばらく疑を存しておくことはかまわないであろう。こういう疑問は既に提出されているかも知れないが、今、歴

という歌を大正元年作の

くろぐろと円らに熟るる豆柿に小鳥はゆきぬつゆじもはふり
と並べるとどうであろうか。五六七番の歌は改選『赤光』
においては、「霜ふりて一もと立てる柿の木はあはれ
に黒ずみにけり」と改作されている。これらの点からみても五六七番の歌を三十八年作とすることに疑問が生ずる
だろうし、そう疑うことがむしろ自然である。

五六八番の歌は「おひろ」（大正二年）の

あな悲し観音堂に癡者めてただひたすらに銭欲りにけり

などの一連中においてみても不自然でない作品である。また前年大正元年の

いちにんの童子ころがり極まりて空見たるかな太陽が紅し
に近い発想だし、五八二番の歌も元年作の

うそ寒きゆふべなるかも葬り火を守るをとこが欠伸をしたり
と、一種けんたいの気持において近いものがあるのではあるまいか。またこの五八二番の「日輪がすでに真赤になり
なければ」などの句も、前掲の「空見たるかな太陽が紅し」共に、太陽光に対する特色な好みを顕著に示めた句であつて、三十八・九年の「馬酔木」や全集補遺などの中には発見できないものである。五八二番を大正元年作と推定することは危険であるが、明治三十八年作とすること

大な量にのぼる茂吉関係の論文を精査する餘裕がないので、ただ私見として提出しておく。プリオリテートを重んじた茂吉の仕事をかえりみれば、そういう調査をする餘裕のないことは特に残念である。（五八年二月七日）

註1 佐藤佐太郎「斎藤茂吉研究」一五四頁

註2 小泉荻三博士「近代短歌史」「恐らく彼の歌の活字になつた最初のものであらふ」（六二四頁）とされたが、全集編纂者の努力によつて、「説苑新聞」所収の三十八年作を最初とせねばならぬ。

註3 小泉荻三博士「近代短歌史」一六三六頁